

出現し、中旬には小型幼生を中心に最大76個体/ m^3 観察された。しかし、数多く観察されたのは1週間程度であり、後続(発生)群はなかった。また、大型幼生数は最大11個体/ m^3 であり、全体的に少なかった。苫前において幼生は4月末から出現したが、幼生出現期間中、その数は極めて少なく、最大でも11個体/ m^3 以下であった。遠別でも4月末に幼生が出現し、5月中は10個体/ m^3 以上の密度で観察された。特に5月19日には小型幼生が300個体/ m^3 以上、大型幼生も47個体/ m^3 みられた。ただし、大型幼生が多かったのは本調査日のみであり、他は5個体/ m^3 以下であった。苫前の付着稚貝は300~1,800個体/袋、羽幌でも約1,000~2,140個体/袋であり、留萌南部よりはやや多かったが、近年良好であった状況に比べ、採苗は不良であった。

(エ) オホーツク海北部(稚内)地区

宗谷では幼生は4月末に出現し始め、5月中は7~53個体/ m^3 の密度でみられた。大型幼生は5月下旬に10~29個体/ m^3 見られた。採苗器は5月中、下旬に投入された。付着稚貝は宗谷では1,000~1,800個体/袋、枝幸では1,500~1,800個体/袋であり、例年の半分程度であった。

(オ) オホーツク海中部(紋別)地区

雄武海域の生殖巣指数は4月25日に最大を示し、以降は低下した。5月9日には指数が20まで低下したため、産卵盛期に入ったと推定された。

浮遊幼生は5月上旬から出現し、5月中旬に小型幼生を中心に20個体/ m^3 出現した。5月下旬には大型幼生が20個体/ m^3 以上(最大は6月2日の89個体/ m^3) 出現し、その後の10日間ほど続いた。最大出現数は大型幼生が多く出現した6月4日であった。沙留では幼生は5月中旬に小型幼生を中心に30個体/ m^3 出現した。その後中旬に一度減少したが、下旬から末に大型幼生を主体に30個体/ m^3 出現した。紋別では浮遊幼生は5月上旬に出現し、中旬には小型幼生を中心に最大115個体/ m^3 みられた。大型幼生は5月末~6月中旬に12~30個体/ m^3 見られた。付着稚貝数は、雄武では580~2,400個体/袋であり、遅くに引き上げた採苗器の方が稚貝数が多かった。沙留でも1,200個体/袋、紋別では試験用採苗器の値も含め475~1,600個体/袋であり、いずれも例年より少なかった。

(カ) サロマ湖、能取湖

サロマ湖における養殖ホタテガイの生殖巣指数

は、4月下旬に最大となり、5月上旬に低下が始まっており、産卵が開始されたことを示していた。5月下旬には指数は15前後になり、産卵盛期は終えていた。浮遊幼生は5月上旬から出現し、5月下旬に小型幼生が1,500個体/ m^3 程度みられた。その後6月に大型個体が100~300個体/ m^3 見られたが6月下旬に幼生数は増大し、5,400個体/ m^3 、大型幼生も2,600個体/ m^3 の最大値を示した。

能取湖では幼生は5月中旬に出現し、6月初旬には1,000個体/ m^3 以上となった。また、大型幼生の割合も多くなり、下旬には12,000個体/ m^3 、大型幼生4,000個体/ m^3 の最大値を示した。幼生の出現数の増減に2回の極大値があることから、能取湖でのホタテガイの産卵は2回ピークがあったと考えられる。試験用採苗器におけるサロマ湖の付着稚貝数は約2,400~11,600個体/袋であり、能取湖の付着稚貝数は5,750~26,100個体/袋であり、例年並みであった。

(キ) オホーツク海南部地区(網走・斜里)

網走では幼生は5月中旬に出現し始め、6月上旬までは100個体/ m^3 前後で推移した。6月中旬から幼生数は多くなり、6月下旬には1,260個体/ m^3 となった。大型幼生数は6月下旬に123個体/ m^3 であった。斜里では調査を開始した5月中旬には幼生が450個体/ m^3 出現しており、6月中旬には最大789個体/ m^3 、大型幼生が574個体/ m^3 見られた。付着稚貝数は網走が22,000~30,000個体/袋、斜里では20,000~65,000個体/袋であり、平年並みであったが、海域としては他地区より多い状況であった。

(ク) 根室海峡(羅臼)

浮遊幼生は5月下旬に出現し、中旬に196個体/ m^3 、大型幼生は33個体/ m^3 と最大値を示した。

イ ヒトデ出現状況

日本海側ではヒトデの付着が多い場所では3~5個見られた場所も希にあったが、その他の海域ではほとんど出現せず、影響は小さかった。

ウ まとめ

本年の採苗状況としては産卵時期は平年並みかやや遅れた。日本海全体の採苗成績は不良、とくに南部海域では平年の1/3~1/8程度であり、近年にない採苗不良となった。オホーツク海でもやや不良であったが、南部海域の網走海域および能

取湖では平年同様、高い密度であった。本年の採苗不良は、大型幼生が極少だったことと関係があると考えられる。また、本年の産卵期前後の日本海側の海洋環境は、例年になく津軽暖流水の勢力

が弱く、冷水域が広がっていたことがわかっている。採苗とこれら環境要因の関係について、今後明らかにする必要がある。

付表1 調査担当機関（2008年）

調査地点	調査担当機関	
寿都	後志南部地区水産技術普及指導所	寿都町漁業協同組合
神恵内		神恵内漁業協同組合
小樽	後志北部地区水産技術普及指導所	小樽市漁業協同組合
厚田	石狩地区水産技術普及指導所	厚田漁業協同組合
浜益		浜益漁業協同組合
増毛	留萌南部地区水産技術普及指導所	新星マリン漁業共同組合増毛支所
小平		小平支所
苫前	留萌北部地区水産技術普及指導所	北るもい漁業協同組合苫前支所
羽幌		羽幌支所
焼尻		焼尻支所
初山別		初山別支所
天塩		天塩支所
遠別		遠別漁業協同組合
雄志志内	利尻地区水産技術普及指導所	鷺泊漁業協同組合
鬼脇		鬼脇漁業協同組合
稚内	稚内地区水産技術普及指導所	稚内漁業協同組合
声問		声問漁業協同組合
宗谷		宗谷漁業協同組合
猿払		猿払漁業協同組合
枝幸	枝幸支所	枝幸漁業協同組合
雄武	網走地区水産技術普及指導所	雄武漁業協同組合
沙留		沙留漁業協同組合
紋別		紋別漁業協同組合
サロマ湖		サロマ湖養殖漁業協同組合
湧別、佐呂間、常呂		湧別、佐呂間、常呂漁業協同組合
能取湖	東部支所	西網走漁業協同組合、網走市
網走		網走漁業協同組合
斜里		斜里第一漁業協同組合
羅臼	根室地区水産技術普及指導所標津支所	羅臼漁業協同組合
標津		標津漁業協同組合

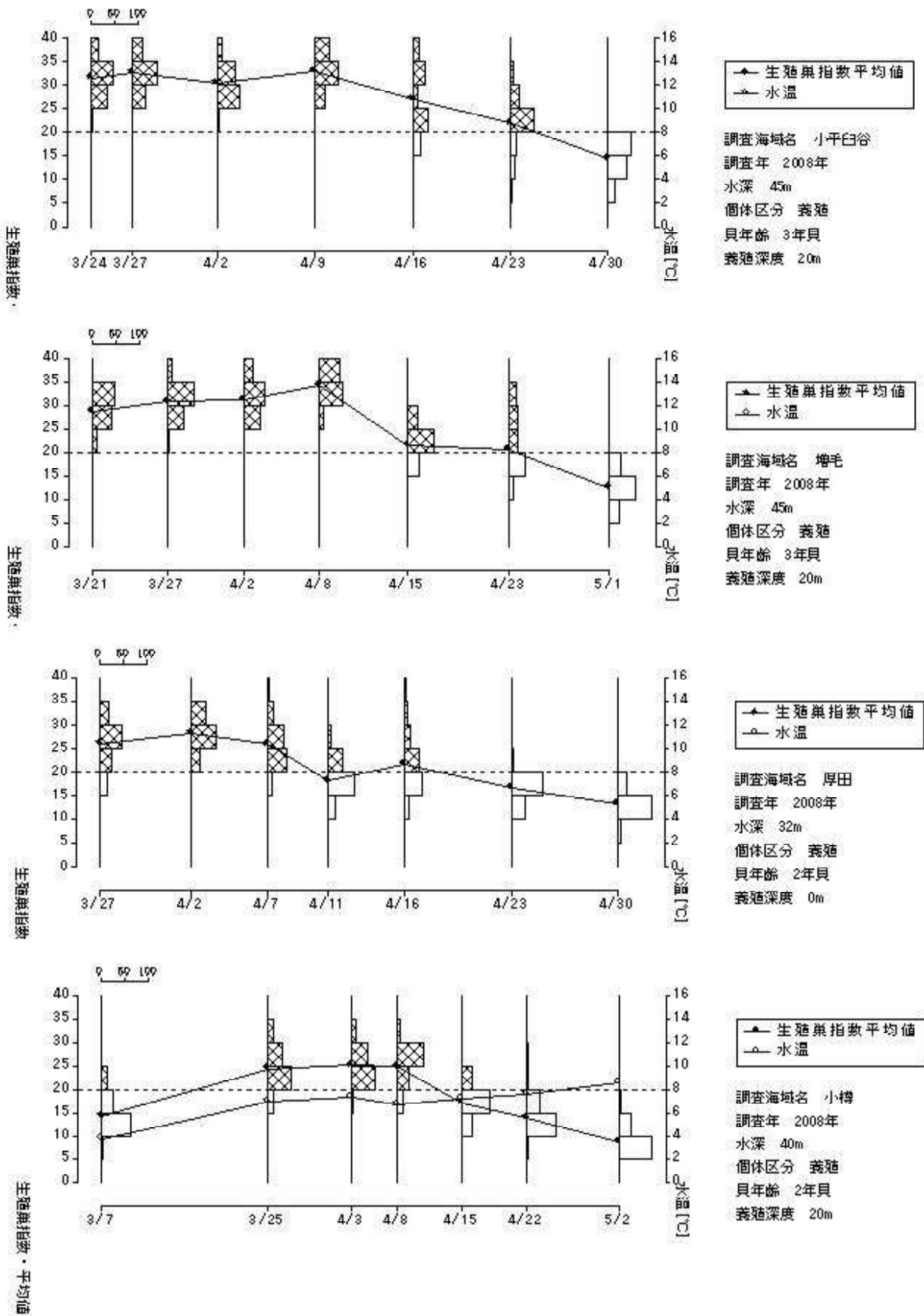


図 2-1 日本海南部海域におけるホタテガイ生殖巣指数の変化 (2008)

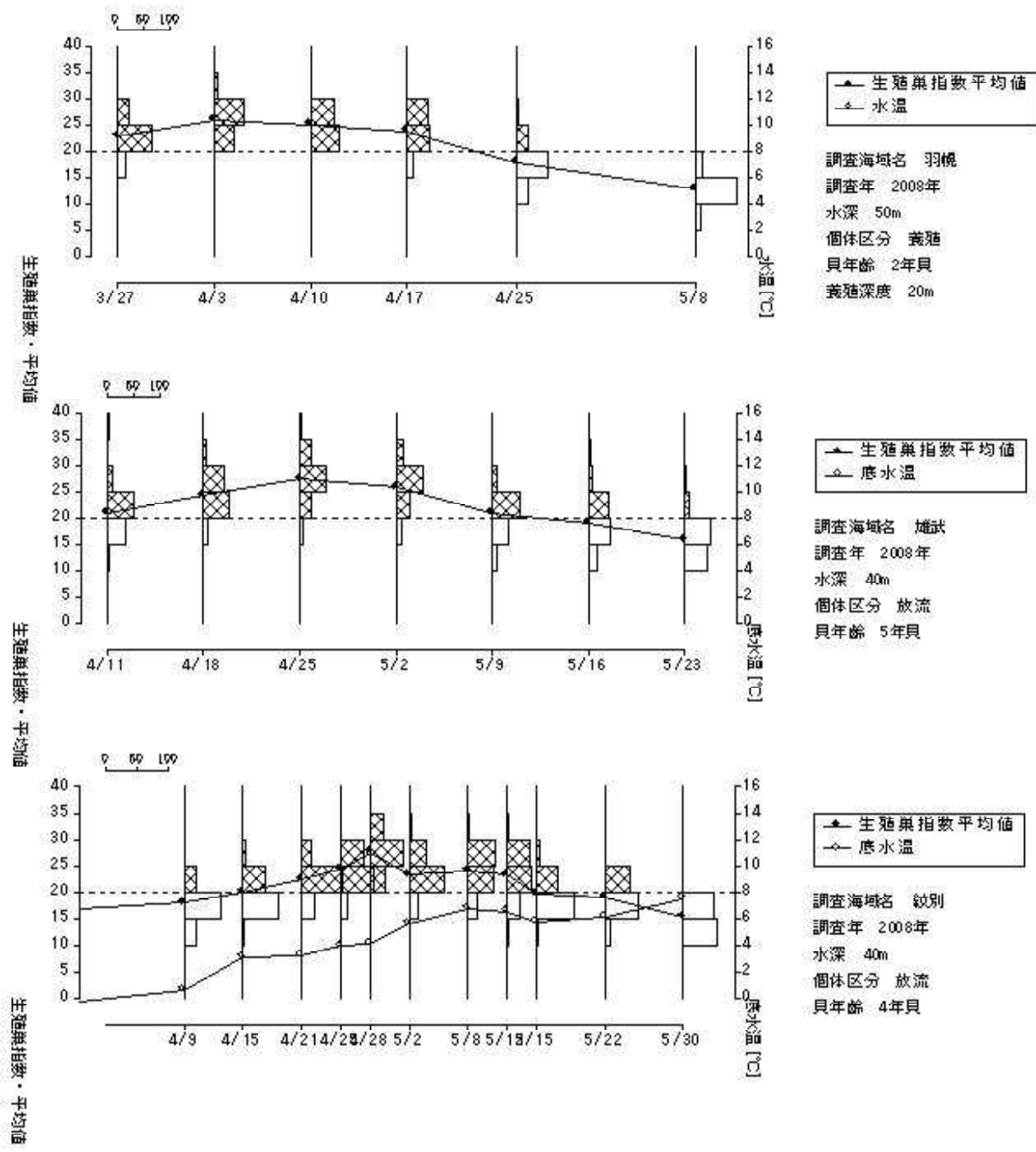
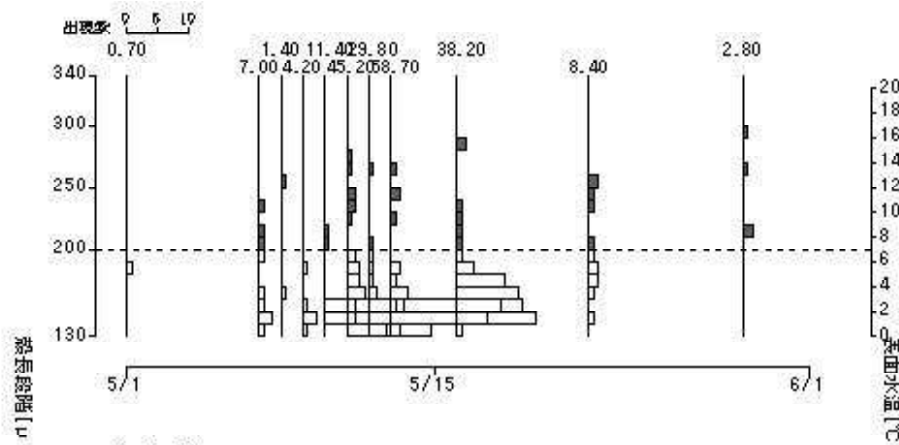
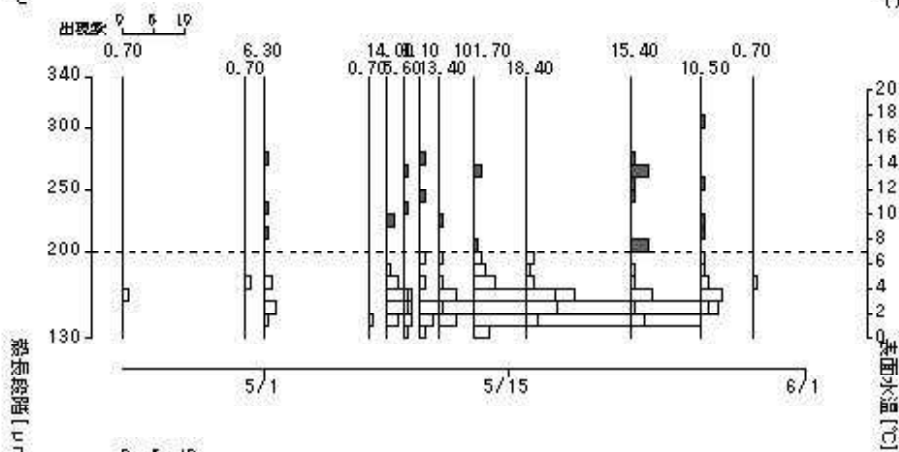


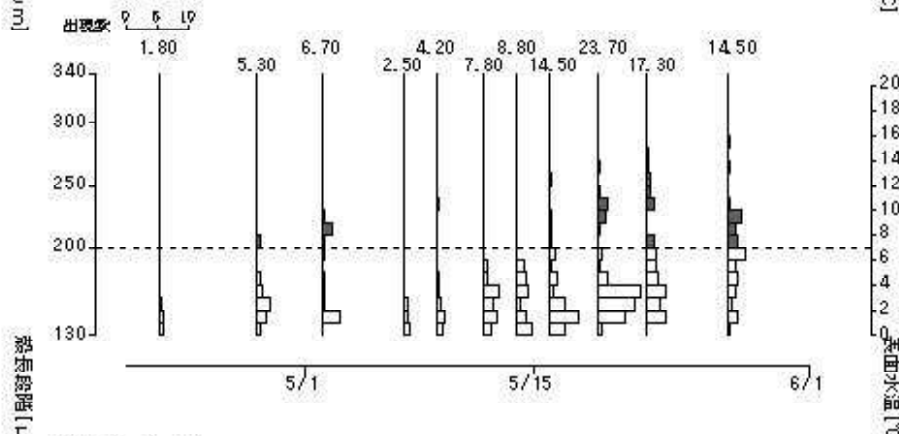
図2-2 日本海北部海域～オホーツク海域におけるホタテガイ生殖巣指数の変化 (2008)



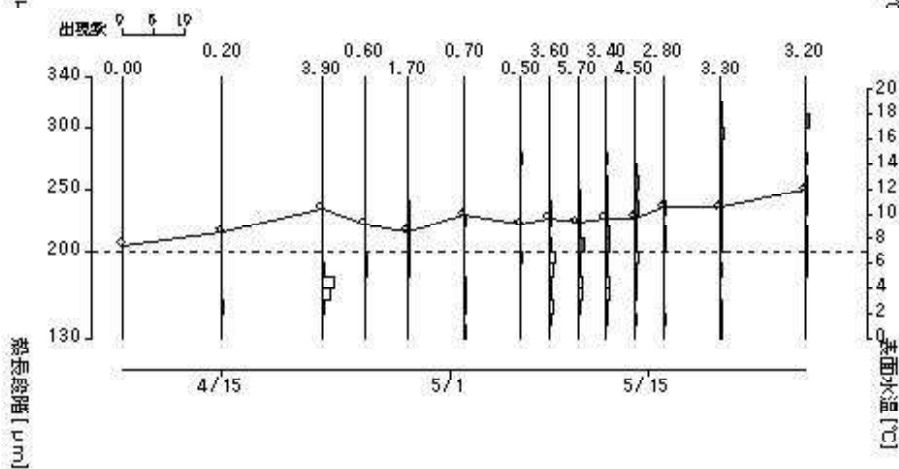
調査海域名 小平白谷
 調査年 2008年
 水深 45m
 曳網開始深度 20m



調査海域名 増毛
 調査年 2008年
 水深 45m
 曳網開始深度 20m



調査海域名 厚田
 調査年 2008年
 水深 25m
 曳網開始深度 20m



調査海域名 小樽
 調査年 2008年
 水深 40m
 曳網開始深度 22m

図3-1 ホタテガイ浮遊幼生の出現状況（日本海南部海域 2008）

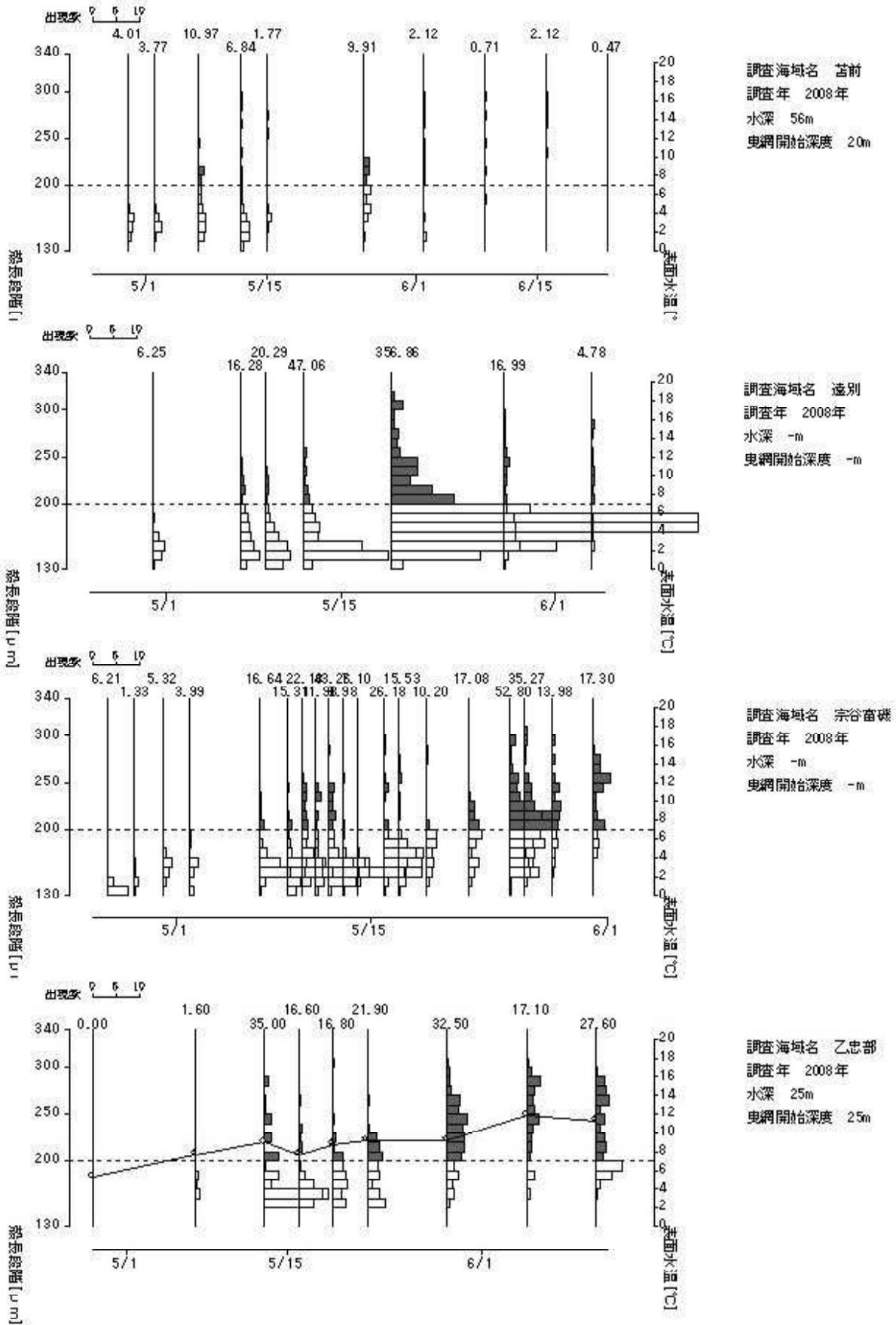


図3-2 ホタテガイ浮遊幼生の出現状況（日本海北部～オホーツク海北部海域 2008）

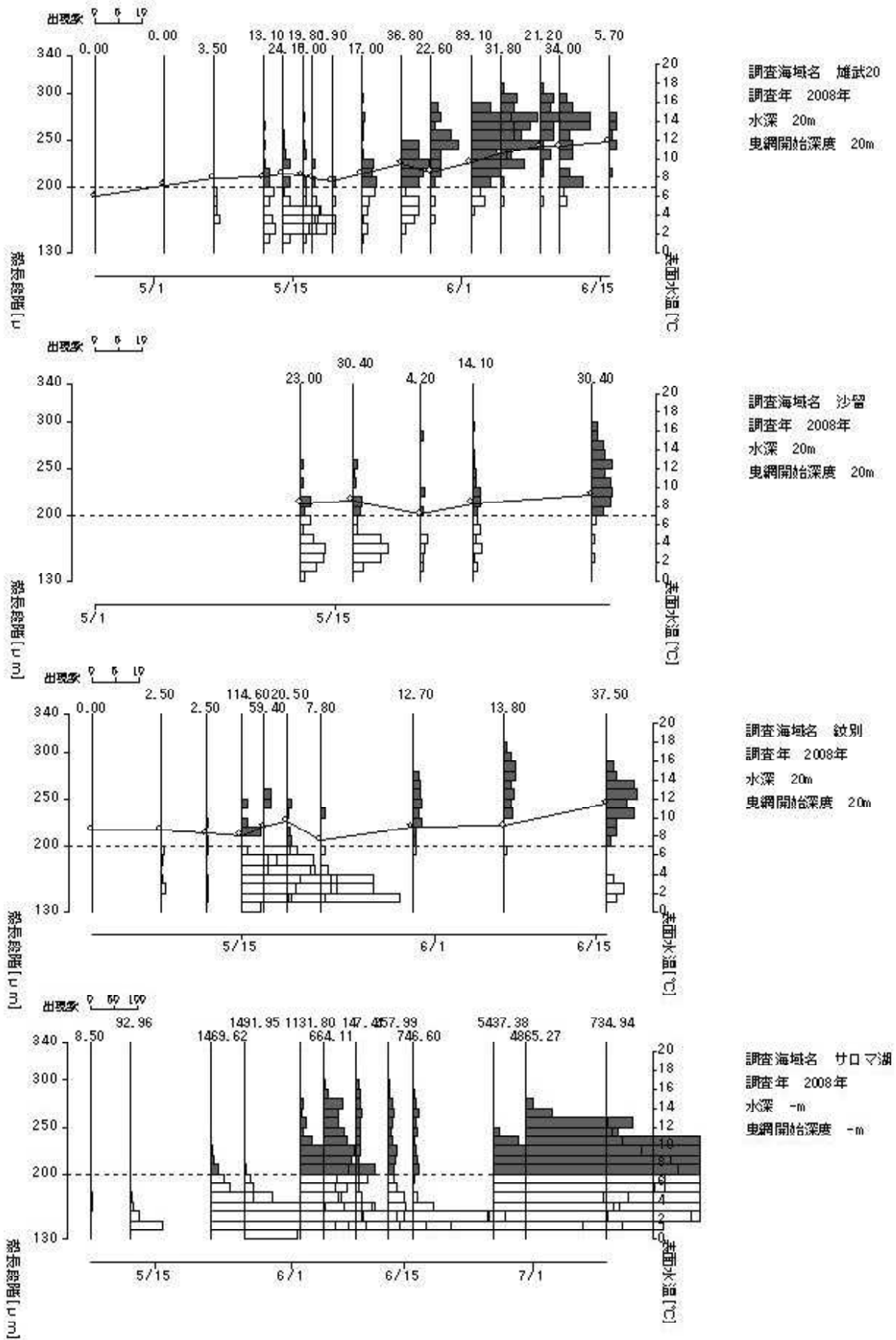


図3-3 ホタテガイ浮遊幼生の出現状況（オホーツク海中部海域 2008）

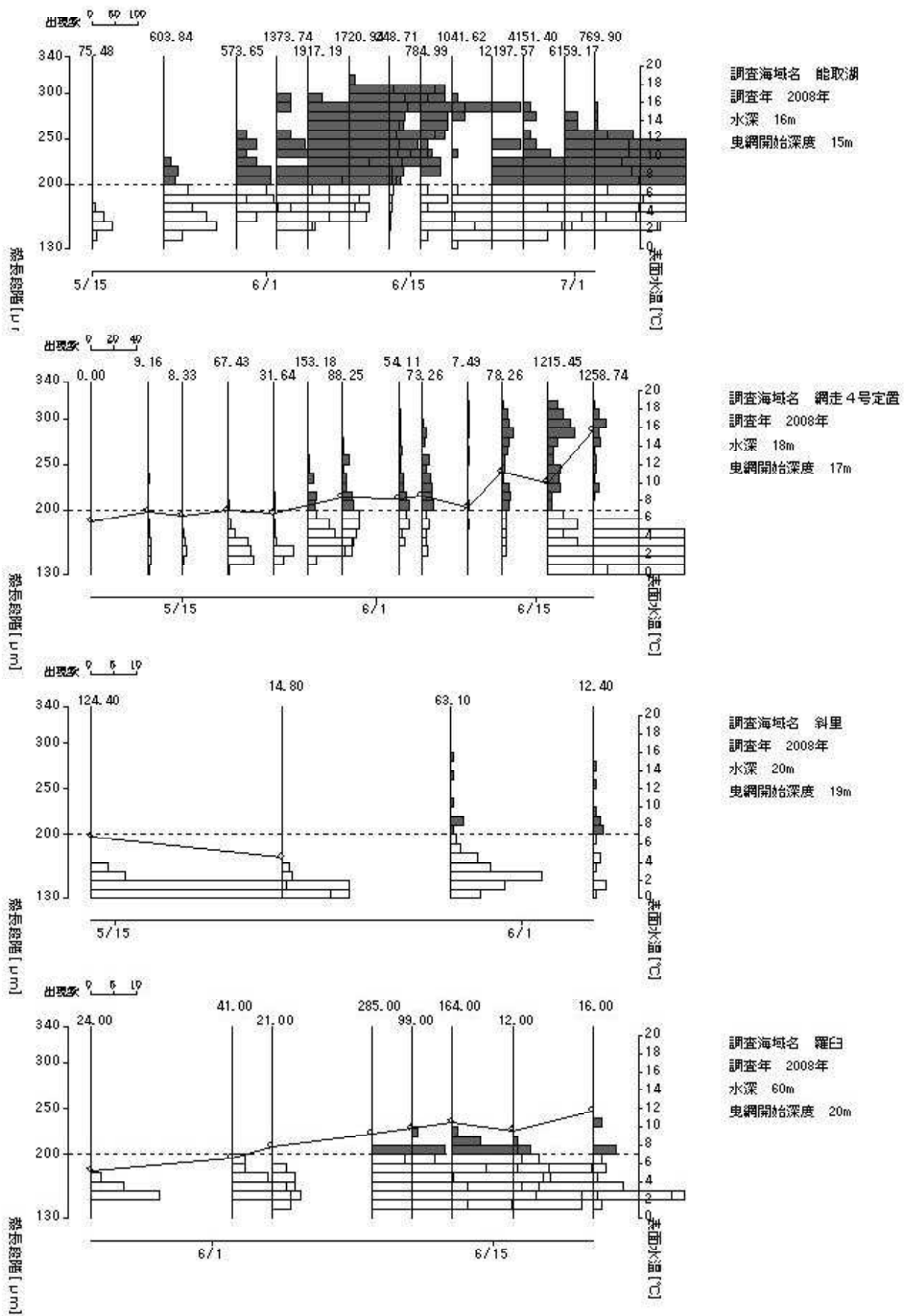


図3-4 ホタテガイ浮遊幼生の出現状況 (オホーツク海南部海域, 根室海峡 2008)

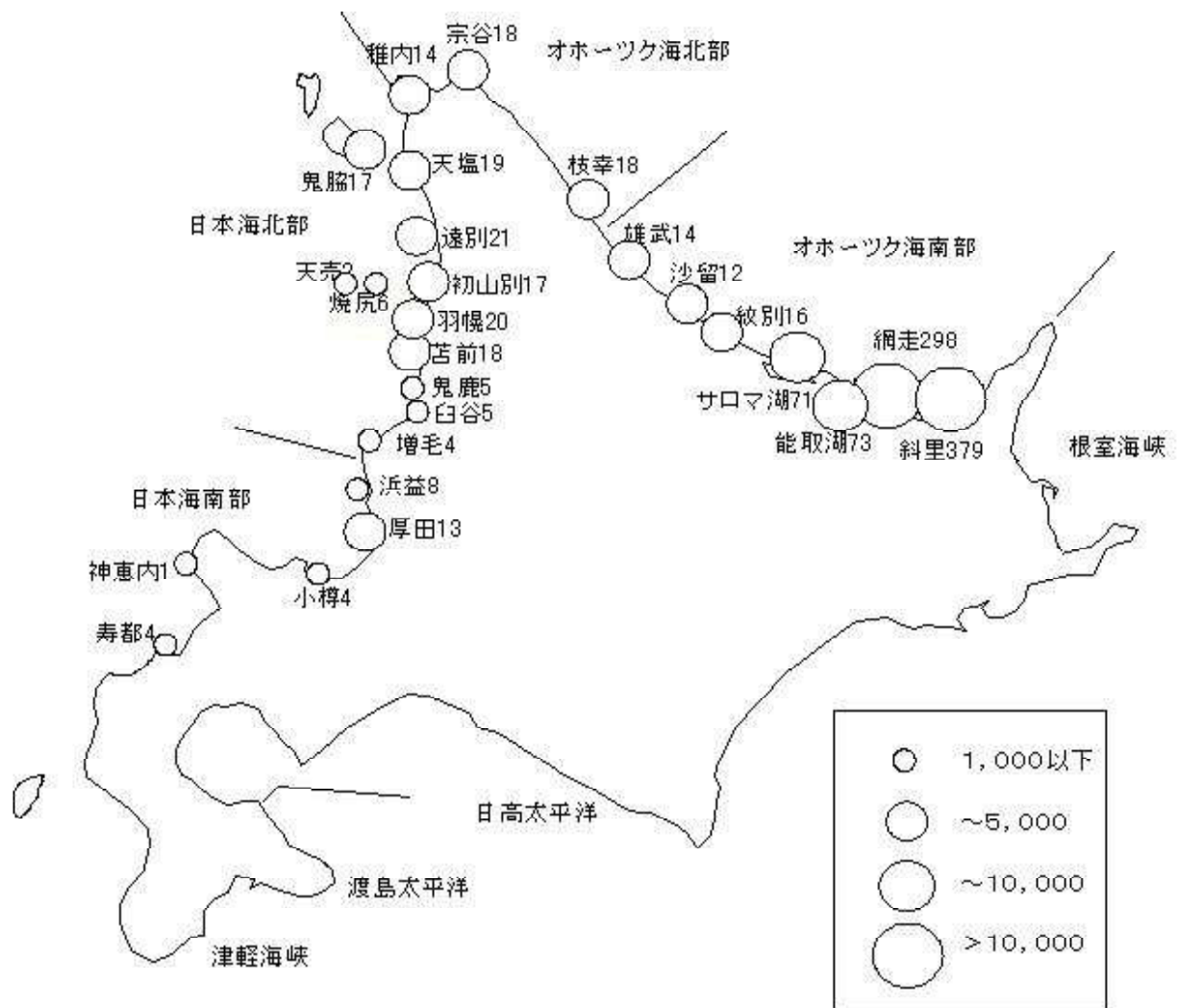


図4 ホタテガイの採苗器への付着状況（個体数/m³、ただし地図内の数字はその1/100）